

環境ベンチャーのイークル、バイオマスで温泉加温サービス

2015/10/14 11:55 | 日本経済新聞 電子版

環境関連のコンサルティングを手掛けるベンチャー企業、EECL(イークル、山口県下関市)は温泉施設向けにバイオマス燃料を活用して温泉を加温するサービスを始めた。木質ペレットを燃やすボイラーで加熱した温水を施設に供給し、温泉の湯の加温などに使ってもら。施設側は重油を使う場合に比べ、燃料代を年間10~15%削減できる見込みという。

山口県長門市で山村別館と枕水の2つの温泉施設向けにサービスを始めた。木質ペレットの原料となる木は二酸化炭素(CO2)を吸収して育つため、燃やしてもCO2を排出したと見なされない「カーボンニュートラル」と位置付けられている。イークルは今回のサービスで山口県産の木質ペレットを使っている。ペレット使用量は年間250トン程度と想定する。

イークルは長門市で温泉施設の近くに1時間あたり189メガ(メガは100万)カロリーの熱量を出すペレットボイラーを設置、温めた湯を施設に供給する。ボイラーとペレットを入れるサイロは1つのコンテナ内に収納されている。温泉施設は送られてきた温水を使い、熱交換器を通じて温泉の湯を温める。水道水を温めて、客室などで使う湯にするのにも活用できる。事業費は約6千万円で国の補助金などを活用した。

温泉施設では温泉の加温などに化石燃料の重油を使ってきた。ペレットボイラーを採用することで重油の使用量が減少する。環境保全に配慮し、燃料代を削減できるとして、ほかの地域でもサービスを展開する方針だ。城下隆社長は「5年後は10カ所でサービスを提供したい」としている。10カ所で提供した場合、同サービスによる売上高は年間1億円程度とみる。

イークルは2011年に創業したベンチャー企業。城下社長は産業機械メーカー出身で同社は太陽光やバイオマス燃料といった再生可能エネルギー事業のコンサルティングを手掛ける。15年4月期の売上高は約8000万円。新事業の展開で売上高拡大を目指す。

NIKKEI Copyright © 2015 Nikkei Inc. All rights reserved.

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。